
ネコミミに可愛い以外の意味を求めてはいけない

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネコミミ元可愛い以外の意味を求めてはいけない

【Zマーク】

Z0230G

【作者名】

シロクロ

【あらすじ】

あらすじってか、まあ要するに…私がネコミミつけた頭のイカレたガキに出会う話、かな。

「ねえ、お姉さん、キスしたことある?」
「ないわよ」

突然に何を言つたこのガキは。
見た目小学生の安っぽいネ^{リリリ}をつけたガキは、にこにこ笑いながらアイスを食べている。

「あんたは?」
「あるよ」
「…あ、そ」
「妬いた?」
「バカ死ね」
「酷い」
「つか名前も知らないのに妬くわけないじゃん」
「僕はミー^リちゃん。お姉さんは?」
「おねえ。だからお姉さんと呼べ」
「ちょっと、あんまりにあんまりな偽名だね」
「つるわい。猫のくせに逆らつの?」
「いやー」
「がるるる」
「ふかー」
「ガブリ、むしゃむしゃ」
「食べられたー?」

私はけつとわざとじろじろやでぐれてアイスのローンを口につけこんだ。
バリバリとつるわいこくら^リだが、どうせガキの話を聞く気はない。

「、お姉さん？」

「ん？ まだいたの？」

「こねよ。お姉さんや、アイスおじやもひとこてその態度はどうよ？」

「うひ やこ」

「くー、何ならもつーつおじやあがてもこですかぢる？」

「たこ焼き食べたい」

「……」

「早く」

「……お姉さん、年下のおじりに対しこの態度は……」

「3秒で買つてきたりキスしてあげるわ」

「行つてきますー！」

ガキは走つたが、買うだけでも3秒以上かかるのは当然だ。1分近くかかるつてガキは戻つてきた。

「うひやー。」

「おつー。あふつ、熱つ。冷まし

「ふーふー。はこうひやー」

「ん、はふはふ……ん。あんがと」

「あの……」

「ん？」

「キスは？」

「は？ あんた、3秒で帰つてきたつけ？」

「……ないです」

「あなたも食べる？」

「はい。あーーん」

「ほー」

「あひひひひひー！ でも食べるー！」

「おい。口、大丈夫？ 口内ってかなり簡単に火傷するよね
「そうなんだよね。痛いよ～。お姉さんのツバでおして？
「は？ つか、あれってガセでしょ？ 何万の菌がいる人の唾液ぬ
つてなおるわけないじゃん。メリットはせいぜい乾かないくらいで
しょ」

「むー、わかんないですよ。空気中の菌に触れないから治りやすい
のかも！」

「口の中だから問題ないわね」

「しまつたー！」

「うぜー。死ね

「生きるー！」

「マジうざ。ちょっと、缶コーヒーちょうどいい」

「じゃあ今度こそキスを

「やだよ

「えー？」

「ちつ

私はネ「///」を引つ張つてガキのほつぺたに歯をぶつける。

「早く行けよ

「イエス！ マム！」

買つてきたコーヒーを飲

「私はカフェオレしか飲まないんだよー。チエンジー！」

「イエス！ パパ！」

今度こそコーヒーを飲む。

「ところでカフェオレとコーヒーは別物では…？」

「つるさい黙れ」

「甘党なお姉さん萌え~」

「死ね」

「生きるー」

今度は唇に歯をぶつけやる。

「いいから黙れ」

「.....」

「財布」

「.....(ほん)」

「よしよし。どれ...げ、なにこれ。万札何枚あんのよ。これだから最近のガキは.....」

「.....」

「おい、あんた」

「は、はいー」

「名前は?」

「ミー!「ちやんです! やさぐれお姉さんらぶ! 結婚して!」

「やだ。毎日金くれんなら愛人にしてあげてもいいけど」

「僕が愛人なの?」

「は? 下僕だけど?」

「ちょっと、愛はどこに?」

「ないけどキスしてやろうか?」

「お願いします!」

「よく見なさい。唇からつながって、首は唇と同じ皮膚よ。んでつながってつながって、はい、大地にキスしなさい」

「...ま下さいです」

「マジでしやがった。土下座こしか見えねー」

「これが孔明の罷か!?」

「や、あんたのイロボケ」

「とにかくお姉さん」

「何よ

「何でここにいるのかな？」

「待ち人。」
「ねーけど。来たら私を待たせた罰で殺す

「誰を待つてんの？」

「さあ。親父の再婚相手の連れ子のお迎え。母親は夜に会ひながら子供は先に家に来てもうつんだ。女子高生だつてや」

「あ、やつぱり」

「あ？」

「それ僕だよ。いやー、『真通り可愛い』なあ。一目惚れだし」

「はあ？」

「大丈夫。連れ子同士は結婚できるんだ」

「……年上？」

「うん。僕のことは『ちやんちやん』って呼んでね

「……女子高生？」

「うん」

「……マジかよ。まあ女の子だとは思つたが僕つて言つてるしなあと
か思つたが……つか、さつさと言えよ！ 1時間も無駄にしたわ！」
「やー。写真で顔は知つてたけど、お姉さん何も言わないからも
かして人違いかなーなんて」

「つか何でネ？！」

「あ、趣味」

「…………はあ。まあいいや。帰るよ」

「お姉さんお姉さん、名前はサキだよね？ サキちゃんでいい？」

「ふざけんなガキ」

「えー、だつて僕がお姉さんだし」

「うぜー」

「まあでも、僕のことは『ちやんちやん』でよろしく。恋人になつてお

姉さんじや変だしね」

「誰が恋人だ」

「サキちゃん」

「あんたはペットだろ」

「キスしてくれないの？」

「…あんたが下僕になるなさいこわよ

「いいよ！ サキちゃん好き好き！」

「はあ…どこのが年上なのよ」

「全て…」

「…とにかく帰るよミーハ」

「うん！ 『主人様大好き！』

「その呼び方はやめるクソガキ！…！」

「てゆーか…私女子中学生なんだけど… 結婚とか無理だし」

「気合いだー？」

「疑問かよ、レズビアン死ね」

「ちよつ、同性愛差別禁止！」

「大丈夫。あんた以外には言わないから」

「え？ 僕だけ特別？ いやん、ドキがむねむね～」

「死ね」

「生き

「それはもういいから」…「はい」

「いい？ 同性と未成年は結婚できないの」

「大丈夫だよサキちゃん。あと3年でサキちゃんは16だから。そ

したら同性愛に理解ある海外に引っ越すうね

「合法的に婚姻させようとするな」

「そんな！ 僕とキスしたくせに！」

「遊びだし」

「…そんなはつきりと…」

「は？ あんた本気なの？」

「一目惚れです」

「…ひくわあ」

「ええ！？」

「てゆーか、あんた見た目がガキじゃなくて男だつたら犯罪よ」「いや！ 僕も未成年だし！ インコウにはならないはず…」

「ネ「//」がよ」

「そつち！？」

「当たり前でしょ。いい年して何でネ「//」よ」

「可愛いでしょ？ あ、サキちゃんもつけたいの？」

「いらん！ 外すな！ 渡すな！ 背伸びするな！」

「届かないからしゃがんで？」

「しないって！」

「似合うと思うんだけどなあ…」

「頭痛い子に見えるから」

「え…あた、舞い太古？」

「無理矢理聞き間違えるな。何よ舞い太古つて」

「いやあ、だつて僕、学校で成績オール5だし」

「…死ね！」

「だから、オール1のサキちゃんに教えてあげるね！」

「ぶつ殺すぞ！？ 誰がオール1よ！ 1なんてないわよ！…」

「またまたあ」

「死ねよ…」

「ところでサキちゃん、家はまだ？」

「そこの角だけど…悪いこと言わないから、隣の空き家に住まない

？ 段ボール箱はあげるから

「何でホームレスにしようとするのヤー！？」

「大丈夫、ちゃんと拾つてくださいこいつを書いておくわ

「しかもペット扱い！？」

「当たり前じやない」

「こやこや。サキちゃんと一つ屋根の下だよ嬉しーー。」「よし、ちょっと家出するわ！」

「何でだよ！ 大丈夫！ 痛いのは始めてだから！」

「何する気だ！？ ちょっと、半径一メートル以内に近寄るな変態ーー。」

「冗談だつて」

「…変態が言うからシャレにならないのよ」

「…いっぱいぬらせば、痛くないんだよ」

「…（ピ、ポ、パ）、あ、もしもし警察ですか？」

「ストーキング！ 何普通に警察に通報してんのーー。」

「はい、変質者です」

「やめてーーー！」

「…冗談よ」

「ほつ」

「今のは知り合いの精神科医に電話してたの」

「ちょっとちよつと！ 姉に対し敬意が足りないよーー？」

「あんたは身長が足りないじゃない」

「可愛いからいの」

「はあ？」

「可愛いは正義！ きやぴるーん！」

「…もしもし、救急車お願いします」

「…めんなさいめんなさいめんなさいーー！」

「…あんた、本当に私の姉になる人間？ 山田みこーっ。」

「うん。これからは佐々木みこーだけね」

「くそ…合つてる」

「…そんなに本気で悔しそうこじしないでよ」

「無理」

「即答だ。でも泣かない！ お姉ちゃんだもんーー。」「死ね！ ここが家よ」

「僕らの愛の巣だね」「僕らの愛の巣だね」

「親父とあんたの母親の巣だよ」

鍵をあけて中に入る。親父は勿論仕事中だ。

「//ーーー」

「なになに？」

「あなたの部屋は一階だから一階には入らないでよ」

「一階に僕とサキちゃんの愛の部屋があるんだね」

「一階には私の部屋と物置だけだ。一番奥。荷物はあるから行け」

部屋に戻つて制服からジャージに着替える。

「おじやましまー、つて鍵がかかってるー?」

「どそどそと入るから着替え終わつてから開けてやる。

「なに?」

「もう着替えちゃつたの? セツカくネ////持つてきたのに」

「服と関係ないし、つけないから」

「似合うのに」

「つけたことないのに断定するな」

「大丈夫。アイコラ写真で試したからー。見て! 全裸バージョンもあるよー。」

「犯罪者が! つかの写真、乳でかすぎー。」

「ごめんね。別にサキちゃんみたいな貧乳が駄目なわけじゃないんだよ」

「貧乳言つなー。」

「だよねー。サキちゃんは品乳だよねー。」

「フォローになつてねえよー。」

「大丈夫。今日は本物のサキちゃんをオカズにするから」

「生々しいわー。」

「中学生でキスもまだなサキちゃん萌え！」

「てめえとしたけどな」

「手取り足とり股とり愛してあげる…」

「いらねえよ！ そして股言つな…」

「まん…！」

「よりヒワイにするな…」

「ヒワイって言うサキちゃん萌え…」

「ちびのくせにヒワイなことを言うな…」

「サキちゃんが大きいんだよ」

「背の順はちょいと真ん中だ」

「僕は一番前だよ…」

「当然だな」

「サキちゃんのサテイスト！ でもそこが好き…」

「死ね！」

「…サキちゃん、わかつてるの？」

「…何だよ」

「今、僕らは一人きりなんだよ？」

「で？」

「…ふふ、声をだしても誰にも聞こえないよ

「よし、遺言の用意はいいか？」

「ちよつ、どつから木刀だしたの！？」

「私は剣道初段だ。そして強盗対策にベッド下にいれるのは常識だ」

「サキちゃんは何人だよ！」

「日本人だ。いいから死ね」

「ふふ、僕だつて……水泳10級だ！」

「しょぼすぎる…」

「そんなバ力な！」

「…何で自信満々なんだよ」

「だつて…幼稚園の先生は凄いねつて」

「何年前だよ」

「んー去年かな」

「嘘をつけ高校生」

「本当にもん！去年ビートオ見たもんー」

「ビートオの音声かよー！」

「当たり前じやん。僕16だもん」

「いいから、もう出でていけ」

「やだ。愛を語りつよ」

「は？死ねよ」

はあ…これから二つが毎日いるかと思ひと頭痛がする。

「ねえサキちゃん」

「何だよ」

「大好き。キスしてもいい？」

「…一万円くれたらな」

「財布」とあげたじやん

「払えないならなし」

「サキちゃんの外道！鬼畜！ビートナシー 愛してるー」

「つめるやーーー」

私は噛みつゝようになり二つの頬にキスをした。

「ここから黙つてる」

「……（じゅり）」

二一七は財布を出した時のよつに真つ赤になつて静かになつた。やれやれ…バカの相手は疲れるわ。

ま、静かにしてれば、可愛いんだけどな。

それこそ、ちんけなナンパにて初対面でキスをしてしまつべり
いには、な。

「とつあえず……これからよろしくな、ミーハー」
「……（うへうへ）」

END

(後書き)

ノリで書いた。 じつじつ意味なんてないようなバカな会話が好きです。

ストーリーは後から付けたので分かりづらいかもですが、 中学生が義理の姉を迎えて行つてネコミミにナンパされながら待つてると結局ネコミミが姉だったと言うオチです。

しかし姉… ネコミミ僕口リ少女とか詰めすぎか?

題名はまあそのままです。 ネコミミをつけてるのは可愛いからで、他に意味はありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0230g/>

ネコミミに可愛い以外の意味を求めてはいけない

2010年10月8日15時52分発行